

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

Al Vi Kara

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

N-ro 95, julio 2008



“Funa-Hoko” estas unu el 32 sanktaj veturiloj nomataj “Jama-Boko” de Gion-Macuri. S-ro Kawagoe fotis ĝin en la 13-a de julio, 2008. Bonvolu legi la klarigon pri ĝi en la 16-a kaj 17-a paĝoj.

ENHAVO

Ni vigle agadas en Kioto ! (活動報告)	
第 56 回関西エスペラント大会への参加	3 p
(La 56-a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo)	
Kioto-Esperanto-Societo ricevis la KLEG-Premion	4 p
(京都エスペラント会が K L E G 賞を受賞)	
Kiotanoj aktivis en la Kansaja Kongreso	5 p
(関西大会での京都會員の活躍)	
新会員の自己紹介 (小山 貴代次)	8 p
Kion vi pensas? (川越 幹)	9 p
音声教材作成の体験から (相川 節子)	10 p
Lia peto venas al mi, kiam la antaŭan peton mi forgesis.	
(光川 澄子)	13 p
kiam vi ne respondas (山村 友子)	16 p
Klarigo pri la Foto sur la kovrilo (表紙の写真の解説)	
(森川 和徳)	16 p
Mia parolo al mi mem (光川 澄子)	18 p
Esperanto-Universitat/et/o (森川 和徳)	19 p



Ni vikle agadas en Kioto !

このコーナーは、京都エスペラント会の月刊の活動情報誌「事務局通信」(川越 幹さん編集)の記事を中心に、主な活動を紹介するものです。今回は、2008年6月の関西大会の情報を掲載します。

第56回関西エスペラント大会への参加

La 56a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo

- ・日時 2008年6月7日(土)～8日(日)
- ・場所 プラムイン城陽(京都府城陽市)
- ・参加者 241人(不在参加者を含む)

京都エスペラント会および関係者の参加者(五十音順、敬称略)
相川節子、川越幹、川村千代、川村泰範、後藤美和、後藤穂高、
笹沼一弘、田平正子、田平稔(不在参加)、津田昌夫、出口直子、
出口ゆかり(不在参加)、浪川光代(不在参加)、成田和子、藤本達生、
光川澄子、宮本聖子、村上正彦(不在参加)、森川和徳

・京都エスペラント会会員のトピックス

- 1日目・分科会「三日坊主で終われない教授法あります」(川村泰範さん)
- 2日目・分科会「エスペラント・ミニ大学」(笹沼さん、森川さん) 19p
- 京都エスペラント会がKLEG賞を受賞 4p
- 朗読コンクールの中上級者の部で、後藤美和さんが第一位を受賞 7p
- 源氏物語の翻訳活動に対し、藤本達生さんにKLEG奨学金を給付 7p

京都エスペラント会・例会

毎週水曜日・午後7時から9時まで、エスペラント会館にて

エスペラント教授法の講習会

毎週水曜日・午後7時30分から9時まで、エスペラント会館にて
有志の学習会

毎週月曜日・午前10時30分から12時まで、エスペラント会館にて
子連れ参加も歓迎

有志の研究会

毎週木曜日・午後7時～9時、エスペラント会館にて

有志の土曜日のおしゃべり会

毎週土曜日・午後2時～4時、京阪丹波橋駅西側の喫茶店「リーブル」

Kioto-Esperanto-Societo ricevis la KLEG-Premion. (K L E G 賞を受賞)
 KLEG taksis ke nia societo aktive agadis antaŭ kaj post la lastajara UK; ni
 varme bonvenigis multajn alilandajn esperantistojn kaj okazigis 5-fojan serion
 da prelegoj de alilandanoj.



D-ro Konisi, Prezidanto de KLEG, donis la
 premion al s-ro Sasanuma, Prezidanto de nia
 societo.



Libro-kuponoj kiel
 akcesoraj premioj

Atestilo de la
 KLEG-premio
 (dekstra)



Kiotanoj aktivis en la Kansaja Kongreso (関西大会での京都会員の活躍)

Jen estas la Kongresejo,
“Plum Inn Joyo”.
Ĝi estas bona publika
instalaĵo ĉirkaŭita de verda
natio, malgraŭ iom
malfacila trafiko.



Okazis Koruso en “Gaja Vespero”
en la unua tago. Kune kantis s-ino
Micukaŭa (tria de maldekstre) kaj
s-ino Deguĉi (kvina de dekstre).

S-ro Kawamura prezentis
Bosonovon ludante gitaron en
“Gaja Vespero”.





Virina grupo ludis Noan komedion “Sakeo per tubo” (狂言「樋の酒」) en “Gaja Vespero”.
S-ino Kasahara ludis bone uzante ventumilon.

S-ro Sasanuma prezentis “Historio de Familia Registro en Japanio” (日本における戸籍制度の歴史) en la fakkunsido “Esperanto-Universitat/et/o” antaŭtagmeze en la dua tago. Ankaŭ legu la 19-an paĝon.



S-ino Tahira interpretis la publikan prelegon “Esperanto kaj mi” de s-ro Igor Wasilewski, polo.

S-ino Goto partoprenis en la deklama konkurso, portante sian infanon sur la dorso. Ŝi gajnis la ĉampionan premion en la klaso de Progresintoj.



D-ro Konisi, Prezidanto de KLEG, donis la atestilon de Stipendio al s-ro Huĝimoto por lia tradukado de “Rakontaro Genĝi”.

Kaj li esprimis sian dankon al ĉiuj.



新会員の自己紹介

小山 貴代次 (こやま きよつぐ、京都府長岡京市)

Mi estas 80-jara en la venonta jaro. Mi estas tre laca, do mia edzino estas malsana kaj 2-foje mi iras al hospitalo en ĉiu monato. Mia edzino ricevis operacion de koro 2-foje en 5 jaroj.

新人ではありませんが再見します。

エスペラントにふれたのは 18、9 才の立命大の学生で有った頃、同大学で宗教哲学の国分教授やカニヤ書店の s-ro 中原から、その後柔道界で引き分けの名人と云われた s-ro 龍武一郎と Evangelio de horo をテキストにして anarkiisto 山鹿泰治氏から学んだ。暗いが未来が見えたような青春だった。

20~28 才を結核のため malsanlito に有ったが、その中で懸命に学んだのが大学書林の『エスペラント四週間』で有る。その後の二、三年が tasko はなかったが Esp をべらべら喋れた私の最高の水準で有った。

NHK の集金人を 4 年して立命大に就職し、60 才定年、その後ロンドに入ったが長続きはしなかった。

現在も再独習しているが muro は破り難く malfacila で有る。私は月一回の utao のロンドにも参加しているがそれも欠席しがちである。

年寄りには死ねとばかりに保険証を送ってくる政府に怒る。世界の中の民族対立、内戦等、民族対立を乗り越えるのがエスペラントが大きく、en la mondon venis nova sento で、もっと大きく世界にアピールすべきではかならうか。英語は世界語で有るという人がいるが、どれ丈の人がそれを駆使できるか、それに隷属関係はぬぐえない。

小山貴代次 (趣味 utao、骨董収集)



Diversaj impresoj

Kion vi pensas?

Lastatempe multaj japanoj havas tendencon tiel egoisman kaj senpaciencajn. Mi tiel juĝas. Ofte popolo riproĉas registaron pri diversaj problemoj de vivoj, kiel asekuro, pensio, sekureco k.t.p.

Kompreneble tio estas ne misago por plibonigo de registara problemoj. Ankoraŭ tio povas finiĝi malbonan regadon kaj proprigon k.t.p.

Sed en alia parto, ni popolanoj iomete ne havas respondecon kiun ĉiuj devas havi.

Ekzemple, mi trovas popolanojn, kiuj metas libere sian biciklon antaŭ stacidomo. Pro tio fizika handikapito ne povas trapaŝi la placon.



Kaj en stacia vojo ili elĵetas rubojn, malpuraĵojn k.t.p. Popolanoj ĉiam havas kontraŭdiran korton.

Mi pensas ke popolanoj devas fari demandon laŭ sia ebleco. Fine, pli modestecon, por realigi amikecon reciproke kun la popoloj de la mondo. Kion vi pensas?

(Kawagoe kan)

音声教材作成の体験から

相川 節子

今年の関西エスペラント大会の記念品は、昨年の記念品であった「エスペラント会話教室」の内容を、新しくCD版にしたものだった。わたしもこのCDの作成にかかわり、いろいろと勉強させていただいた。

今後音声教材を作る人のために、この経験をまとめておく。

CDの概要

- 名称 : エスペラント会話教室 新訂版
形状 : CD 2 枚組、ケース入り、ジャケットなし
読み手 : タニヒロユキ、後藤美和
盤面デザイン : 後藤美和 (小西岳の表紙絵を使用)
発行部数 : 240 部



作成経過

記念品に音声教材を、という提案は、宇治城陽エス会のメンバーから出たもので、藤本達生さんの「エスペラントはこうして話す」も候補にあがっていたが、最終的には竹内義一さんの「会話教室」に決まった。中道民広さんがプロデューサーになって、関係者への依頼や録音の期日を詰めていった。タニさんに原盤作成を引き受けていただいたのは、昨年10月の日本大会の頃だった。タニさんのご指名で、後藤さんに相手役をお願いした。

実際に録音したのは今年の2月23日で、タニさんの編集作業が終わって原盤が届いたのが4月2日。それから、原盤の細かいチェックと校正にかなり手間をかけ、タニさんに何度も手直ししていただき、最終盤を受け取ったのが4月15日だった。

CDのコピーは、宇治城陽エスペラント会のメンバー4人(清水博子、近藤聡、熊本絹江、相川)で手分けした。わたしも含めて、こういう作業に経験豊富な者はいない。CDコピーに使えるソフトが自分のパソコンに入っていることを知らなかった人もいた。それでも手分けしてできたのはありがたかった。むずかしい作業ではないが、数が多いので、ひとりでやっていると根気が続かない。

コピー作業をする一方で、後藤さんに盤面デザインを考えていただき、また中道さんを通じて、小西さんの絵を使う許可をいただいた。

コピーできたCDの盤面印刷は、わたしがひとりでやる結果になった。何人かで楽しくおしゃべりしながらの印刷作業をしたかったが、CDに印刷できるプリンターが限られていることと、大会が近づいてみんな忙しくなったことで、共同作業のだんまりをする余裕がなかった。

反省点いろいろ。

(1)録音内容のチェック

原盤が一応できたとき、編集ミスだけをチェックすればいいと、軽く考えていた。しかし、現実には、読み上げミスもいくつかあった。単語をひとつ読み飛ばしていたり、過去形の動詞を -as と読んでいたり。

考えてみればあたりまえのことだった。本や雑誌の原稿の場合、どんなに優れた人が書いても、ミスは必ずある。だから何度も校正して、原稿を完全なものにしていく。音読だって同じだ。たとえタニさんや後藤さんという、考えられる限りでもっとも信頼できる読み手を得ても、ミスをゼロにはできない。そう気づいたので、最初から最後までていねいに聞き、ミスを見つけるたびにタニさんに連絡して、修正版を送っていただいた。タニさんは音声編集ソフトを使って、パソコンの画面で波形を見ながら、音節単位で切り貼りをなされたそうである。

(2)録音音質

今回のCD作成でいちばん大きい問題になったのが録音音質だった。

録音の場所は京都のエスペラント会館で、防音仕様の部屋を使った。しかし、全体に「ザー」という雑音が入っている。部屋が小さすぎて、音が室内に反響したものらしい。タニさんは編集ソフトで可能な限り雑音を除去されたのだが、それでもかなり残った。また、後藤さんの声は明瞭に録音されているが、タニさんの声がかくぐもって聞こえる。これはマイクの性能によるものらしく、これも編集でフィルターをかけたりと工夫してくださったが、完全に明瞭にはなっていない。結局、記念品にとどめて、商品化はしないことに決まった。

原盤づくりはお金をかけて、それなりの部屋を借り、マイクもいいものを使うべきだった。

中道プロデューサー(？)は、これからさらに工夫して加工するなり、録音しなおすなりして、よりよいものを再発行したいと思っておられるそうだ。

(3)音声ファイルのコピー作業

複数で手分けしてコピーするので、誰もが持っているソフト、Windows Media Playerを使うことを最初は考えた。しかしこれだと、トラックとトラックの間に2秒ずつ無音の時間が自動的に挿入されてしまう。つまり、各トラックの間隔が2秒ずつ長くなる。実害はないものの、原盤と同じものをつくるという意味のコピーにならない。タニさんから「CDを焼くのはソフトではなくドライブの機能であり、どのソフトを使ってもやっていることは同じ。結果はドライブの性能で決まる」と聞き、ソフトを揃える必要はないと知った。そこで、各自が持っているCDライターで、CDのまるごとコピーをすることにした。

問題は2枚組だということ。CD1とCD2が混ざらないよう、作業中も一目で区別できるようにしなければならない。中身がCD1なのにCD2と印刷してしまうよ

うなことがあってはたいへんだ。そこで、CD 1用とCD 2用のディスクのメーカーを別にした。それでも不安で、CD 1用はホワイト地、CD 2用はシルバー地を使った。記念品をお持ちの方は気づかれたかもしれないが、CD 2（緑色の方）にだけ光沢があるのは、シルバー地を使ったせいである。

(4) 盤面印刷

わたしが持っている盤面印刷用のソフトは、プリンタに付属していたものである。だから、原則として、同じ機種 of プリンタでしか使えない。デザインをする後藤さんと、印刷をするわたしが同じソフトを持っていれば問題はないのだが、そうはいかないので、後藤さんにはデザインをワードで作っていただき、それをプリンタ付属のソフト(Epson MultiPrintQuicker)に手作業で書き写した。

関西エスペラント連盟の事務所にも、CD 盤面印刷のできるプリンタがあるが、わたしのとはメーカーがちがうので、同じファイルを扱えない。今回はたまたま商品化しないことになったから、結果的には問題がなかった。でも今後商品をつくる時には、初めから、関西連盟のプリンタで扱えるファイル形式で盤面のデザインをした方がよい。

盤面のデザインをする時に、文字とイラストを入れるだけでなく、背景にも色を使うと、素人っぽく見えず、見栄えが良い。ただし、当然ながらインク代は高くつく。今回 240 部、つまり 480 枚を印刷するのにほぼ 2 セットのカラーインクを消費した。(そのうち 1 セットは電気店のポイントで買ったので、立替金は 1 セット分しか請求していないが。)

また、インクジェットなので、ぬれた手でさわったり水がかかったりすれば、たちまちインクがにじんでしまう。このことに関する注意書きを書いたシールを貼っておけばよかったと、あとで思った。

dankoj

ここまでに名前をあげた方々、ありがとうございました。また、読み上げミスのチェックを手伝ってくださった西千寿子さん、CD のコピーや印刷を頼めそうな業者をネットでさがして費用を調べて下さった山本鳩江さん、お世話になりました。

関西連盟図書部長の立場でアドバイスをくださった峰芳隆さん、峰さんの依頼で CD を試聴して、助言をくださった方々にもお礼を申し上げます。(2008.6.19)

(resumo)

Oni eldonis kompaktaĵn diskojn “Nova Kurso de Esperanta Interparolo” kiel memoraĵon de la 56a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo. Mi laboris en kontrolo de la enhavo, kopiado de la dosieroj kaj printado sur la diskoj.

(Aikawa Setuko)

Daŭro de la lasta numero

Lia peto venas al mi, kiam la antaŭan peton mi forgesis.

MICUKAŬA Sumiko

Ĉi tiu dua peto de li Hervé venis en 2007 tri jarojn post la unua. Li pripensis gratuldonaci al sia kolego, kiu baldaŭ emeritiĝos, japane tradukitajn hajkojn el esperantaj fare de la kolego. Por tio li petis al mi japanigon, se mi kapablas japanigi ĝin. Ankaŭ ĉifoje mi akceptis lian peton, kvankam la neatendita laboro estis treege malfacila por mi. Nu, kial mi akceptis la japanigon. Tio estas, ke en 1997 li plurfoje sendis al mi la papiliaĵon, tiam lia elpensa unikeco interesis min, kaj mi sentis komunecon kun li. Ĉar cerbumi pri konforma donaco al la ricevonto estas agrable al mi. Sendomaĝe klopodi persiste por fari aŭ serĉi la elpensitan objekton ensorĉas min. Tial mi deziris kuraĝe kunlabori kun lia donaco.

Do mi havis demandojn pri esperanta hajko, ĉu eksterlandana sentiveco al la sezonoj estas sama kiel japana, ĉu ili eblas imagi subtilecon de sezonvorto de hajko. La demandoj malproksimigis esperantan hajkon de mi. Sed tiuj demandoj male ekscitis mian scivolemon al la japanigo, kaj mi legis Rondon Hajkistan en La Movado. La originaloj de esperantaj hajkoj estis kvar. Unu el ili estis la sensezonvorta. Mi ne scias, ke ankaŭ sensezonvorta poemo eblas esti hajko aŭ ne. Por la japanigo kvarspecaj sezonvortaroj de hajko kaj japanaj leksikonoj (klasikvortaroj) helpis min. Al la japanigaĵoj kies signifon kaj prononcon mi aldonis por la gefiloj de la kolego, kiuj deklamos la hajkojn japane kaj Esperante en la gratula ceremonio. Ŝajnas al mi, ke li pensis diverse formi la ceremonion. Tial mi ankaŭ transskribis en katakanao la nomojn de la kolego kaj la gefiloj. Por tio mi petis kunlaboron al franclingva fakulo de mia amikino. Kiel feliĉa afero! Hazarde ĵus antaŭ alveno de la peto iu donacis al mi graciajn paperojn por komputilo, kiu havas similigan desegnaĵon al japana "suminagaŝi", "kasanecugi" k.a.. Mi skribis sur ĝi la japanigaĵojn kun la klarigo kaj mia nomo. Mi poŝte ĝin sendis al li, kiu sur ĝi alskribis la kolegan nomon per katakanao kaj verde metis sigelon de 世界語, kaj ĝi estis sendita al la kolego.

[編集部注] 15 ページに要約があります。

Unua hajko

Inter folioj

janagi suki

柳 すき

(tra inter saliko)

trablus la ĉielo

masao-naru sola

まさを なる 空

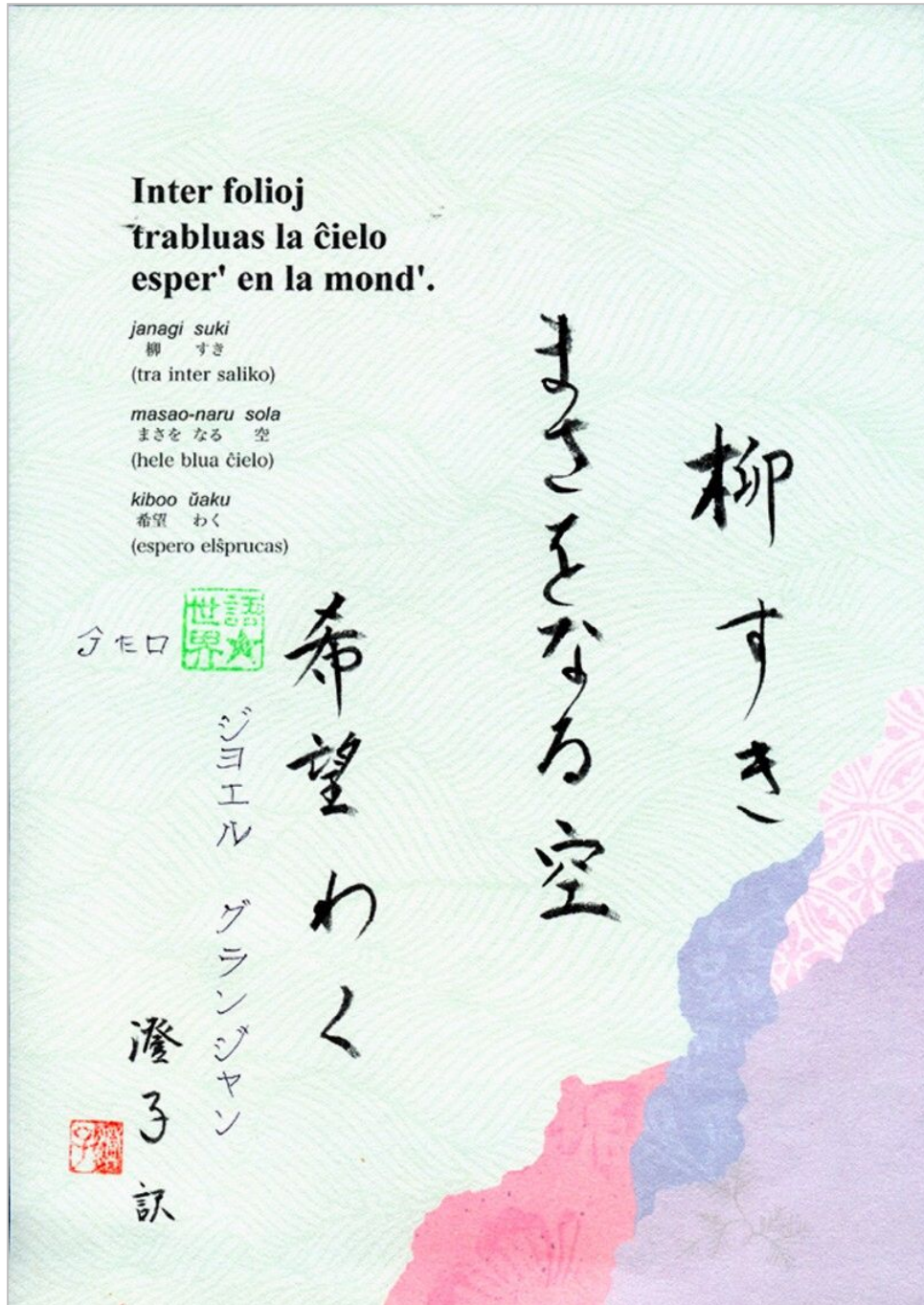
(hele blua ĉielo)

esper' en la mond'

kiboo ŭaku

希望 わく

(espero elŝprucas)



Dua hajko

Vintra ĉielo, <i>zenta moĵo</i> 全天 燃ゆ (brulanta tutĉielo)	fajroruĝa nubaro : <i>hujno juujake</i> 冬の夕焼 (vintra vesperĉielruĝo)	trista krepusko <i>ijo kanaŝi</i> いよ かなし (plie tristast)
---	--	--

Tria hajko

Tristan arbaron <i>ucucu-kaja</i> 現 かや (ho, kiel belega!)	la prujno plibeligas : <i>hujzareŝi moli</i> 冬ざれし 森 (vintre langvora arbaro)	malvarma vintro <i>kili kooru</i> 霧 氷る (nebulo glaciigis)
---	--	---

Kvara hajko

Luma ĉielark' <i>takara hisu</i> 宝 秘す (trezoron kaŝanta)	artaĵo efemera <i>cukanoma-no niĝi</i> つかの間の虹 (pormomenta ĉielarko)	sekreta trezor' <i>azajaka-ni</i> あざやかに (klare)
--	---	---

(En la rakontoj de francaj praavoj troviĝas piede de la ĉielarko trezoro :
ĝi apartenos al tiu, kiu povos iri tiun punkton !)

< 要約 >

2007年、退職する同僚のエスペラント俳句を、日本語に訳して記念品にしたいが訳せるかと、エルヴェさんから2度目の依頼がきた。私には難題だったがあえて引き受けたのは、贈り物を考えて作ったり、捜し回ったりするのが楽しい私は、エルヴェさんの発想に共感したことと、私の外国人の俳句への疑問が、反対にこの日本語訳に好奇心を抱かせたからだった。4種類の歳時記と数種の古語辞典などをたよりに訳し、これをお祝い時に同僚の子どもたちが、日本語とエスペラントで朗読するというので発音や説明も添え、偶然もらった優雅な日本の古典柄のパソコン用紙に書いて送った。エルヴェさんはこれに同僚の名を書き入れ、世界語の印を押して同僚へ送った。

(光川)

kiam vi ne respondas

Jamamura Tomoko

En ĝardeno ekfluis
la luna lumo,
de mia korpo
ekombris sur la ĝardenon
mia ombro.

Mi klinas kapon,
ombro ankaŭ ekklinas
kapon,
mi rektigis la brakon,
ombro ankaŭ ekrektigis
brakon.

Per la piedo mi batas
teron,
ankaŭ ombro kuŝanta
ekpiedbatas teron.

kiam vi ne respondas,
mi ludas kun mia
ombro.

El ombro mi ekstaras,
el mi ombro ekstaras,
ombro kun mi unuiĝis.
Baldaŭ matensono
alaŭdiĝas al ĝardeno,
alproksimiĝas.

Klarigo pri la Foto sur la kovrilo de tiu ĉi numero (表紙の写真の解説)

Gion-Macuri (祇園祭)

Gion-Macuri en Kioto estas festo de Jasaka ŝintoisma templo (八坂神社) kaj oni taksas ĝin unu el la tri grandaj festoj en Japanio. Ĝi celas eviti malfeliĉojn el popolo. Oni diras ke ĝi komenciĝis en la jaro 869, kaj ĝi havas historion de pli ol 1,100 jaroj. Ĝi daŭras de la 1-a ĝis la 31-a de julio ĉiujare, entute unu monaton. El ĝiaj diversaj eventoj, la plej fama kaj vidinda estas parado de grandaj belaj sanktaj veturiloj, Jamaboko-Ĵunko (山鉾巡行) en la 17-a de julio. Nuntempe 32 veturiloj paradas. Ĉiu veturilo estas nomata “Jama” aŭ “Hoko”, ornamita de belaj belartaĵoj, importitaj el Ĉinio, Persio, ktp en la 16-a jarcento. La plej granda veturilo pezas 12 tunojn.

[Daŭrigota al la 17-a paĝo]

[De la 16-a paĝo]

La suba mapo montras, kie kaj kiu sankta veturilo estas rekonstruita por la parado.



Funa-Hoko

Funa-Hoko (船鉾)

La foto sur la kovrilo montras unu el 32 sanktaj veturiloj, “Funa-Hoko”, kie “Funa” signifas ŝipon. Fakte ĝi havas la formon de “ŝipo”.

Ĝia origino estas en legendo el “Kroniko Japano” (日本書記); la imperiestredzino Ĵingu (神功皇后) kaj ŝia armeo transiris la maron por konkeri la Sillan Reĝlandon (新羅) en la tria jarcento.

La nuna veturilo estis desegnita dum Horeki-erao (1751-1764) kaj estis elfarita dum Tenpo-erao (1830-1843). La figuro de la imperiestredzino Ĵingu, kiu kuŝas interne en la veturilo, portas maskon, kronon sur sia kapo kaj majesta skarлата armaĵo. La ŝipa kapo estas kronita de la orkolora birdo “Geki” (鷓), legenda fenikso. Ĝi estas 1.3 metrojn alta kaj 2.7 metrojn larĝa inter siaj ambaŭflugilaj randoj. (Fino)

Mia parolo al mi mem

MICUKAŬA Sumiko

La 12an de majo okazis grandega tertremo en Ĉinio. La novaĵo tuj ekplenigis ĵurnalon kaj samtempe malaperigis novaĵon pri konfuzo de la olimpika flago.

En ĵurnalo Asahi de la 19a de majo estis jena artikolo de studenta voĉo el provinco Ŝisen de Ĉinio.

「テレビやインターネットで現地の状況をチェックしてきたが、『標準語』の北京語や英語で取材する外国メディアの報道を見ていると、被災者が自分の思いを伝えられていないと感じる。実際の状況は見ないとわからないし、四川の言葉で話せば本音を聞かせてくれるかもしれない」

Leginte ĝin mi rememoris pri okazaĵo en socia fenomeno post la dua mondomilito. Tiam japana ekonomio rapide kreskis kaj aro da kamparaj junuloj karavane venis al Tokio, kie la dungintoj atendis ilin kiel malmultekostajn laborantojn. La ĉiutagaj scenoj lanĉis novan popularan kanton 「ああ 上野駅」.

Sed baldaŭ iuj el la junuloj ekrevenis sian hejmlokon ĉefkaŭze de tio, ke urbaj kunuloj mokis iliajn dialektojn. La novaĵo sentigis al mi koleron, kiun mi povas direkti nenien. Verŝajne iliaj dialektoj ĉe la hejmlokaj stacioj karmemorege atingis la orelojn same kiel tiujn de poeto IŜIKAŬA Takuboku.

Kvankam mi profunde ne konsideris nian japanan lingvon, mi senkonscie serĉadis nur neŭtralan internacian lingvon.

Finfine mi renkontis Esperanton, tiam mi forte kortuŝiĝis de la ideo, ke ĉiuj popoloj devas kare konservi sian lingvon kaj lernu Esperanton kiel la duan lingvon por interparoli kun malsamaj popoloj.

Baldaŭ mi mem korpe lernis, ke Esperanto estas lingvo malaperigi landlimojn de nia koro.

Mi esperas, ke kiel eble plej frue multe da ordinaraj homoj en Japanio spertos la afablan mondon antaŭ ol kritiki Esperanton.

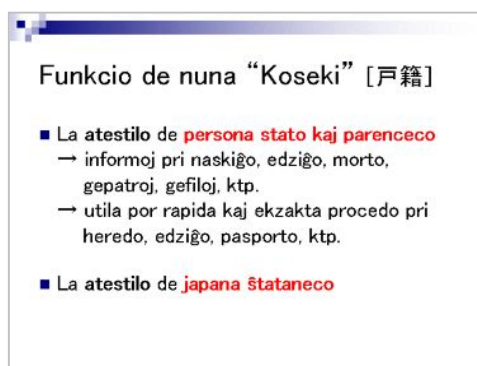
< 要約 >

5月12日の中国四川省大地震の新聞報道で、四川省出身留学生の声を読み、かつて日本で「ああ 上野駅」にうたわれた地方の若者が、田舎訛りをわらわれ帰郷した報道に怒りをおぼえたことを思い出した。単純に中立的国際語を探しつづけた私は、エスペラントに出会い、民族語の保存発展を重んじる思想に深い感銘を受けた。多くの一般の人が、まずエスペラントが心の国境を消す和やかさを体験して欲しい。(光川)

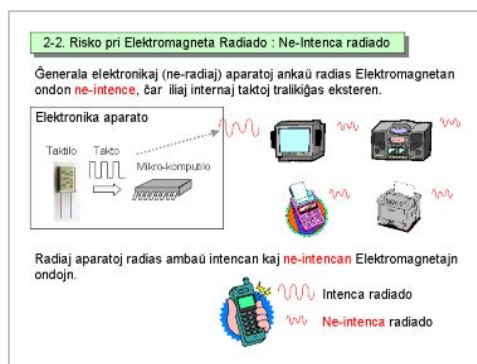
Esperanto-Universitateto

La organizo "Rondo Harmonia" (RH) okazigis Esperanto-Universit/et/on kiel unu el fakkunsidoj de Japanaj Kongresoj ekde 2001, por ke eĉ ne-veteranaj esperantistoj havu ŝancon prezenti siajn specialajn temojn en nia lingvo. Tiu ĉi kunsido okazis ankaŭ en la dua tago de ĉi-jara Kansaja Kongreso, la 8-an de junio. S-roj Sasanuma kaj Morikawa apartenas al RH ekde siaj studentaj jaroj, do ili prezentis la jenajn prelegojn. Feliĉe iuj aŭskultantoj taksis ilin bonegaj.

S-ro Sasanume prezentis la historian temon "Historio de Familia Registro en Japanio" (日本における戸籍制度の歴史) uzante 17 lumbildojn. Sube estas du lumbildoj el ili.



S-ro Morikawa prezentis la teknikan temon "Sekureco de Elektraĵoj" (電気製品の安全性) uzante 16 lumbildojn.



La uzitaj lumbildoj estas publikigitaj en la retejo:<http://esperanto.jp/info.html#univ>

[要約] 笹沼と森川は学生時代より Rondo Harmonia (国際語教育協議会) に所属しており、関西大会の2日目(6月8日)、RH主催の分科会 Esperanto-Universitateto (エスペラント・ミニ大学) で専門分野の発表を行い、好評を得た。(森川)

La Redaktoro babilas - - -

本号(95号)が関西大会関連の記事が中心となりました。実は、編集子は関西には長年住んでおりますが、関西大会に参加するのは何と初めてでした。日本大会を小規模にしたイメージでしたが、多彩なプログラムには驚かされました。

記念品の Kompakta Disko がどのように作製されたのか興味がありましたが、本号 10 ~ 12 ページの記事で謎が解けました。大変なご苦勞に感謝いたします。Kompakta Disko には雑音が多少ありますが、十分に語学教材として使用できると思います。早速、私の i P o d にインポートし、毎日の通勤時に聞いています。

次号の原稿締切日は下記のとおりです。皆さんからの本誌へのご寄稿をお待ちしております。



次号(96号)の原稿締切：10月26日(日)

11月下旬発行予定

電子ファイル版

本誌は、前号(94号)より電子ファイル(PDFファイル)でも発行しています。電子ファイル版では、写真はカラーで見ることができます。電子ファイルを手入れしたい方は、本誌編集局(連絡先は下記を参照)までお問い合わせください。

Al Vi Kara N-ro 95, eldonita en julio, 2008

京都エスプラント会 Kioto-Esperanto-Societo

事務局

〒600-8455 京都市下京区西洞院五条上る八幡町 537-6 エスプラント会館

電話・FAX : 075-958-2475 (川越 幹)

ブログ : http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/

電子メール : esperanto_kioto@yahoo.co.jp

会費 : 正会員 年 7200 円 準会員 年 3600 円

郵便振替口座 : 01000-4-9895 口座名 : 京都エスプラント会

Al Vi Kara 編集局

連絡先 : 〒618-0071 京都府大山崎町尻江 13-8 森川和徳

電子メール : alvikara@yahoo.co.jp